マイウェイ my way

伊藤製作所社長

伊藤　澄夫　3

会社の風呂当番

終戦の1945（昭和20）年に、先代の伊藤正一はわずかな資本金で会社を設立した。戦後復興の波に乗ろうと、多くの企業が雨後のたけのこのごとく設立されたころだ。常に人材難で苦労していた先代は、社員を家族以上に大切にし、気遣いの連続だった。

漁網機械の舟型（シャトル）はニッチ商品であるが、伊藤製作所は当時、世界一のシェアを誇っていた。職人は毎日、汗を流して疲れた身体を癒すため、風呂に入ってから帰宅していた。父親からは「お前たちは職人さんが働いてくれるから学校に行けるし、飯も食べられる。だからいつも職人さんには感謝しろ」と言われ、私は600リットルの大きな風呂を沸かす当番を小学3年から7年間行うことになった。

親の働きを見ていると、とても会社に利益が出るようには思えなかった。それで会社の出費を助ける意味で、マキに代わる燃料を求め、焼け跡から木材を集めたり、近くの三滝川の橋げたに引っかかる竹や流木をリヤカーで集めることも日課となった。

遊び盛りだった私は、近所の友だちと缶けりや鬼ごっこをしながら風呂釜を見守る毎日だった。しかし細い流木では15分もしないうちに燃え尽きてしまい、20分もすれば再び種火からのスタートとなる。小学4年生になったころ、親父はマキを貰ってくれるようになり、缶けりなどの遊びに集中でき、うれしく思ったものだ。

1年後には古くなった釜戸が新品に取り換えられ、同時に燃料は石炭になった。これでますます遊びに集中できる時間が増えた。石炭だと1時間近く火種があるためだ。

5年生のある日、鬼ごっこで鬼から逃げる時、会社の塀に隠れた。ふと見ると煙突から1・5メートルくらいの火柱が上がっており、子どもながらにこれはもったいないと考えた。

そこで翌日、サオにメモリのあるはかりで石炭の目方を図った。火柱が上がる状態で風呂の湯を沸かすのに15貫目（9・3キログラム）の石炭が必要だった。翌日、付き切りで窯に火が当たる程度の火力で、少しずつ石炭を追加し、灰をきれいに掃除するやり方を試してみたところ、半分以下の石炭で沸かすことができた。

このような体験が現在当社で進めているQCサークルや改善活動、コストダウンに通じているのかもしれない。

釜戸から学んだコストダウン

7年間、風呂たきを見守った「ゴロ」